

算数科 授業実践報告

単元名 たしざん

令和4年10月6日(木) 第2校時
授業実践 第1学年3組

《本時の目標》

- 被加数、加数の大小に関係なく10のまとまりをつくれることに着目して、繰り上がりのあるたし算の計算の仕方を、具体物操作や図、式を使って考えることができる。【思考・判断・表現】

深い学びポイント

1 つかむ	2 見通す	3 自力	4 協働	5 練り上げ	6 メタ認知
《授業展開の工夫》 既習の計算方法を全員で確認し、見通しをもった上で新しい計算方法をタブレット上に書き込めるようにすれば、					
《児童の変容》 図をもとに自分の考えと友達の考えを共有し、被加数分解と加数分解の共通点、相違点とそれぞれのよさを話し合う姿がみられ、「深い学び」が実現されるであろう。					

深い学びに到達させる手立て 1

見通しをもった上で新しい計算方法を考える。



ブロックを1こう動かすと、右側に10のまとまりができそうだな。



ぼくは前のやり方を使って、9を7と2にわけて、左側に10のまとまりをつくったよ。

解決すべき課題を明確にし、既習の学びを活用できそうだという見通しをもたせた上で、自力解決を行った。ブロックをどのように動かしたのかが分かるように、タブレットの図に、自分の考えを書き込ませた。図にブロックの写真を使用することで、具体物とタブレットの図がリンクし、考えを書き込みやすくなった。オクリンクで提出させることで、教師が児童の考えを把握しやすくなり、意図的な指名をするのに役立った。

深い学びに到達させる手立て 2

友だちの説明どおりにブロックを動かし、わかりやすく説明できているか確かめる活動を行う。

自分だけがわかる説明で満足するのではなく、友だちに説明し、相手が意図したとおりに操作活動ができるか確かめることで、図や説明をよりよく見直すことができた。

- ① 9はあと1で10。
- ② 3を2と1にわけろ。
- ③ 9に1をたして10。
- ④ 10と2で12。



深い学びに到達した姿

既習の計算方法を全員で確認し、見通しを持った上でタブレットを操作させたことで、図を見ながら、自分の考えと友達のことを共有することができた。また、被加数分解と加数分解の共通点、相違点それぞれのよさを話し合う姿がみられた。

指導講評

指導1課 主席指導主事 日比 瑞輝 先生

- 実物（たまご）を提示したことにより、生活との結びつきがなされ、必要感がうまれた。
- 自分たちで課題を考えられていた。授業の流れがしっかり身についている。
- 「ブロック→タブレット→書き込み」という流れを指示したのは1年生に対しては適切であった。高学年になると、何を使って考えるかも自分で選択できるようになる。
- タブレットに書かせると、教師は一目で進捗状況が分かり、意図的指名に使うことができる。
- ペアの話合いについては、聞き手の視点「話し手の説明を聞いてブロックを動かす」、話し手の視点「自分の説明がきちんと伝わるか確かめる」があったため、話し手、聞き手の双方の学びがあった。
- 後ろバナナ（被加数分解）で考える児童が多かった理由の一つとしては、式が $3+9$ であったのに対し、実物の掲示が $9+3$ の形になっていたことがあるのではないかと。子どもは様々なことを手掛かりとして考えるため、板書など細部まで配慮したい。
- 多様な考えが出る授業、難しい問題の際には、タブレットのよさを生かして他の児童の考えが見られるようにする方法も考えられる。

成果と課題

- ◎タブレットを活用したことで、一人ひとりの考えや進捗状況について、教師が児童の実態を正確に把握することができ、適切な机間指導を行うなど、個別最適な学びにつなげることができた。
- ◎タブレット上だと本時の解き方のよさを実感しにくいことから、本物そっくりな卵の模型を使用したことで生活との結びつきがなされ、本時の方法のよさにせまることができた。
- 児童に送ったデータと実際の黒板掲示が反対になってしまっていたため、既習の内容を手掛かりに新しい方法を考えるという自力解決の過程で、多すぎるヒントとなってしまった。自力解決における情報の与え方を見極める必要がある。